様式３

令和4年度自己評価シート（年度末評価）

校番	202 127	学校名	広島叡智学園中学校・高等学校	校長氏名	福嶋　一彦	全・定・通	本・分

１　中期（3年間）経営目標及び短期（本年度）経営目標

【中期（3年間）経営目標】 （1）国際バカロレア教育（IB プログラム）を，教育活動の主たるツールとして充実を図り，本校の教育目標の達成を目指す。	評価			総合評価
	1年目	2年目	3年目	
	B	A		A

【短期（本年度）経営目標】 IB プログラムを導入した本校のアイデンティティが具現化した姿を，生徒，保護者，教職員それぞれが，交流等を通して目指す学校の姿を自らの言葉で表現するとともに，自らが関与した行動や活動について，その目的や内容を説明することができる。				
【評価指標】 ルーブリックを用いた自己評価（生徒・保護者・教職員対象　４段階）	前年度現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	3．1	3．1	3．1	A

【短期（本年度）経営目標】 日本の学習指導要領と IB プログラムを融合させた指導と学習の充実を図るために，学校の示す方向性を基に，IB 推進チームと教科会の間で適切なコミュニケーションを行うなどして，校内組織の活性化が図られている。				
【評価指標】 教職員対象アンケート	前年度現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	88．7%	90%	90%	A

【短期（本年度）経営目標】 校外の様々な人的・物的資源を活用したプログラムの実施により，IB プログラムの充実が図られている。				
【評価指標】 ルーブリックを用いた評価（校外関係者からのフィードバックを対象　４段階）	前年度現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	—	2．8	—	B

２　年度末評価のまとめ

評価結果の分析	中期（3年間）経営目標	成果	・４年間の MYP プログラムを１期生が修了し，ディプロマプログラムが１月より始まるなど，年間を通して国際バカロレア教育を用いた教育活動の充実を図ることができた。特に，ディプロマプログラムの開始は高等学校１年生だけでなく，中学生にも大変良い刺激となっている印象を受けている。本校のミッション，ビジョン，バリューを認識した上で，学校コミュニティーの構成員である生徒や教職員が具体的な行動を起こそうとしている点に関しては，大きな進歩があったと実感している。
		課題	・高等学校段階では，IBDP を用いた進路実現に向けた進路指導の充実が，今後さらに求められてくる。国内外それぞれの進路実現に必要なニーズに応じた指導ができるように，校内体制の確立及び外部機関との連携を進めていく。
	短期（本年度）経営目標	成果	・MYP から DP への円滑な接続に向け，高等学校１学年会を中心に生徒・保護者に対して丁寧なガイダンスを行うことができた。MYP 推進チームを構成する教科主任とコーディネーター間で情報連携をしながら，年間のカリキュラムを充実させることができた。 ・海外連携プログラムなど年間を通して生徒が自身の可能性を広げるイベントに積極的に参加した。
		課題	・IB プログラムの更なる充実に向け，生徒及び教職員の主体的な学びが欠かせない。しかしながら，授業時間の増加に伴う準備時間の確保や個々の生徒への支援の充実が継続課題として挙げられる。
今後の改善方策			令和５年度は，完成年度に向けた校内指導体制の確立と新たな挑戦が必要な一年となる。ディプロマプログラムを軌道に乗せるために，DP コーディネーターを中心としたカリキュラムの充実に引き続き注力していく。今年度の振り返りの中で見られた課題は次年度に活かせるように授業等の担当者が変わっても業務が引き継げるように教材や資料などを整理していく。生徒には６年間で身につけるべき力を明確にイメージし，不十分な部分を自主的に伸ばしていけるような主体性を期待したい。そのためにも，教員研修や資料の共有など，教職員がお互いに学びあえる環境を学校全体で作り，見通しをもった教育活動が行えるようにする。
学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策			・学校目標達成に向けて，各教科または各教員がどのような取組を行う必要があるのかをイメージできるよう評価指標を工夫する。（アンケート一辺倒にならないように様々な視点で自己評価する。） ・教員研修の在り方を工夫し，教員の IB 指導経験が引き継がれていくように組織的なカリキュラムマネジメントを行う。

様式３

令和4年度自己評価シート（年度末評価）

校番	202 127	学校名	広島叡智学園中学校・高等学校	校長氏名	福嶋　一彦	全・定・通	本・分

１　中期（3年間）経営目標及び短期（本年度）経営目標

【中期（3年間）経営目標】 （２）教科横断的で探究的な学習活動を展開することにより，主体的・対話的で深い学びを実現する。	評価			総合評価
	1年目	2年目	3年目	
	A	B		B

【短期（本年度）経営目標】 授業での学習活動に，見通しを持って粘り強く取り組み，その学習をまとめ，振り返って次につなげたり，仲間や地域の方々との対話や協働を通じて考えを広げたり深めたりすることができる。				
【評価指標】 ルーブリックを用いた自己評価（生徒・教職員対象　４段階）	前年度現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	平均値 ３．２	平均値 ３．２	平均値 ３．１	B

【短期（本年度）経営目標】 正解が存在しない実社会の問いに生徒が向き合い，その課題解決に向けて収集・精査した情報を基に，授業で身に付けた知識・技能を活用して，自らの考えを形成し他者に表現できる，MYP の４年間を見通したプログラムを開発し，それを実践・検証する。				
【評価指標】 ルーブリックを用いた自己評価（教員対象　４段階）	前年度現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	平均値 ３．０	平均値 ３．２	平均値 ３．２	A

【短期（本年度）経営目標】 教員一人一人が「教科横断的で探究的な授業づくり」を行うために必要な研修プログラムの開発を推進するとともに効果的な指導方法や教材開発の共有化を図る。				
【評価指標】 ルーブリックを用いた自己評価（教員対象　４段階）	前年度現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	平均値 ３．２	平均値 ３．２	平均値 ３．０	B

２　年度末評価のまとめ

評価結果の分析	中期（3年間）経営目標	成果	・教科横断的で探究的な学習活動を展開することにより，主体的・対話的で深い学びの実現に取り組むことができた。中でも MYP プログラムの学際的単元（IDU）では，教科と教科を概念で結びつけることで，学校での学びがどのように地域や世界と結びついているのか，生徒が振り返る機会をつくることができた。
		課題	・仲間や地域の方との対話やグループワークを各教科で実践し，生徒は自身の考えを広げることができた。一方で，一つのテーマに対して議論しながら深めていく活動については，時間の制約等もあり，議論の深まりという点では課題が残った。
	短期（本年度）経営目標	成果	・１期生パーソナルプロジェクトの学年平均点は4.38 点と世界平均を上回った。生徒それぞれが自身の興味・関心を広げ，プロジェクトを通してこれまでに学んできた ATL スキルを発揮することができた。
		課題	・自身のプロジェクトをレポート上に上手く反映させる指導には改善の余地がある。パーソナルプロジェクトや課題論文を生徒個人が計画的に進めていけるように，各教科でのプロジェクト型学習を充実させ，スキルの習得や協働的な学び，セルフマネジメント能力の向上に一層努めていく必要がある。 ・十分な教員研修の機会を確保することに関しては，課題が残る。高等学校開校に伴い，時間割が固定化されるため，全教職員で対面形式の教員研修を行うことは難しい。次年度は，研修方法を工夫する必要がある。
今後の改善方策			・次年度は，探究的で深い学びを各教科で実現できるように，各教科内での研究授業等を計画し，組織的に授業の改善とカリキュラムの充実に努めていく。 ・未来創造科の授業では，開校より地域や外部組織等との連携を図ってきたことを活かし，実践的な学びを一層充実させることを目指す。特に，広島 G7 サミットの開催に伴い，現中学校２年生のグローバルジャスティスの成果発表を大崎上島島内及び広島市内で行う計画を立てている。 ・教師の協働的な学びを促進していく。各教科で年間の目標を定め，授業改善に取り組んでいけるように，IB 推進チームを中心に本校での研修スタイルを確立する。
学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策			・完成年度に向け，総合的な学習・探究の時間を中高６年間の一貫したカリキュラムとしていく。 ・大崎上島にある一つの学校として，中学校段階での SA 活動，高等学校での CAS 活動などを通して，地域社会へ貢献できるような取組を奨励していく。 ・各教科での取組事例をお互いに共有したり，教師の協働的な学びが促進されるような環境づくりを行う。（教師の専門性を活かした教育活動のさらなる展開）

様式３

令和4年度自己評価シート（年度末評価）

校番	202 127	学校名	広島叡智学園中学校・高等学校	校長氏名	福嶋　一彦	全・定・通	本・分

1　中期（3年間）経営目標及び短期（本年度）経営目標

【中期（3年間）経営目標】 （3）寮生活における多種多様な人とのコミュニケーション活動等を通して，将来のリーダーとしての人格の陶冶に努める。	評価			総合評価
	1年目	2年目	3年目	
	A	A		

【短期（本年度）経営目標】 集団への所属感や連帯感を深め，集団の構成者であることを自覚し，人と人との触れ合いやつながりを深めていくことができるようにする。				
【評価指標】 生徒アンケート調査における肯定的回答の割合	前年度現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	92%	95%	89%	B

【短期（本年度）経営目標】 生徒一人一人が，寮生活におけるきまりを厳守し，主体的に規律ある生活を通して，安心して充実した寮生活を送れていると感じることができるようにする。				
【評価指標】 生徒アンケート調査における肯定的回答の割合	前年度現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	96%	98%	93%	B

【短期（本年度）経営目標】 生徒一人一人が，自己の健全な生活を実現するために，食に関する意識を高め，望ましい食習慣を身に付けている。				
【評価指標】 生徒アンケート調査における肯定的回答の割合	前年度現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	84%	88%	84%	B

2　年度末評価のまとめ

評価結果の分析	中期（3年間）経営目標	成果	・生徒は，自治的な活動を通して，様々な場面で責任を持ち，与えられた役割を果たすことで，リーダーシップやフォロワーシップを発揮することができた。また，自治的活動が活発になることで，協働する力やコミュニケーション力を伸ばす機会を増やすことができた。
		課題	・集団としての高まりがある一方で，個々の課題を抱えている生徒は多い。集団への指導と支援の一層の充実を図るとともに，個々の生徒が持つ課題へ柔軟に指導・支援ができる体制づくりと教員の生徒支援に対する専門性の向上が必要である。 ・多様な文化背景を有する生徒を尊重する学校文化の構築のために，生徒同士だけでなく，教職員同士，生徒と教職員が積極的にコミュニケーションをとることができる集団及び組織づくりが必要である。
	短期（本年度）経営目標	成果	・生徒の自治活動の一層の充実を図ることで，集団への所属感や連帯感を深めることができるような仕組みづくりを行うことができた。 ・多様な文化背景を有する留学生も交えて，高等学校の寮則について協議する機会を設けることで，異文化理解を図ることができた。 ・食に関する指導や給食委員会の活動などを通して，食事マナー（手洗い・食事の挨拶・配膳・下膳時のお礼等）についての定着だけでなく，諸外国の食文化や食品ロスへの興味・関心を高めることができた。
		課題	・自治的な活動が充実してきている一方で，実際の生活におけるルールやマナーが守られていない場面も見られる。自治的な活動の充実を推し進めるとともに，自治的な取組を寮生活や個々の生活の改善につなげることができるように継続的な支援と指導が必要である。 ・食事の挨拶・配膳・下膳時のお礼などの定着や食品ロスへの興味・関心が高まっている一方で，好き嫌いやお菓子の食べ過ぎ等による食事の残食率が高いことから，成長期である生徒の望ましい生活習慣の向上への支援と指導を図るとともに，献立内容の工夫や改善についても検討していくことが必要である。
今後の改善方策			・生徒の自治的な活動を充実させるとともに，活動の取組が生徒の実際の寮生活に活かされるような活動への支援及び指導体制を整える。 ・生徒と教職員がコミュニケーションを図る機会を積極的に作ることで，個々の生徒に対する理解を深め，個の生徒に応じた支援体制を充実する。 ・A4LC 活動の充実や運動系の課外活動の充実を図ることで，「運動・睡眠・食事」のバランスの取れた生活を実現するための支援を推進する。
学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策			・生徒の活動や生活を充実するために，教職員が指導や支援の専門性を向上させるとともに，生徒同士がお互いに声を掛け合ったり，サポートし合ったりするマインドセットの醸成や環境づくりを行っていく。

様式３

令和4年度自己評価シート（年度末評価）

校番	202 127	学校名	広島叡智学園中学校・高等学校	校長氏名	福嶋　一彦	全・定・通	本・分

1　中期（3年間）経営目標及び短期（本年度）経営目標

【中期（3年間）経営目標】	評価			総合評価
	1年目	2年目	3年目	

教員が，子供と向き合う時間が確保されていると感じることができている。

【評価指標】 業務改善アンケート項目における肯定的回答の割合	前年度 現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	92．9%	95%	92%	B

【短期（本年度）経営目標】
教職員全員が勤務時間に対して高い意識を持ち，時間外における勤務を縮減している。

【評価指標】 一月当たりの時間外勤務時間が 45 時間以下の教職員の割合	前年度 現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	81．3%	100%	82%	C

【短期（本年度）経営目標】
教職員に対して，全体・学年・分掌において，形態を工夫しながら，働き方改革に関する研修を実施している。

【評価指標】 各学年・分掌において，年間２回研修を実施する。	前年度 現状値	本年度		評価
		目標値	実績値	
	14回	20回	16回	B

2　年度末評価のまとめ

評価結果の分析	中期（3年間）経営目標	成果	
		課題	
	短期（本年度）経営目標	成果	・「業務改善アンケート項目における肯定的回答の割合」は，ほぼ昨年並みである。「学年・分掌における研修の実施合計回数」については，ほぼ全ての 分掌や学年で，働き方改革に関する研修を実施した。日頃からの声掛けや業務分担だけでなく，年次有給休暇の計画的な取得，ICT の活用，見通しを持った業務遂行，帰宅時間の目標設定等，働き方改革に対する意識が具体的な行動により一層表れるようになった。
		課題	・「一月当たりの時間外勤務時間が 45 時間以下の教職員の割合」については，目標値には到達してはいない。 ・完成年度に向けて，新規事業が増えていく中で，完成年度を見据えた業務の計画・遂行が不可欠である。 ・日頃から効率的で効果的な業務分担や方法を意識しながら，業務を遂行し，改善点を洗い出し，検討していく必要がある。 ・意図的・計画的な準備の取組に加えて，業務を取捨選択し，時期ごとに担当が業務に注力できる組織体制を構築していく。
今後の改善方策			・校内で業務改善に向けた意識を一層高めていく。特定の教員に業務が偏ることがないように主任等が継続的に実態把握し，年度途中でも柔軟に役割分担を追加・変更するなどして，業務の平準化に努めていくとともに，スクラップアンドビルドの視点から，業務内容を精査していく。
学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策			完成年度を見据えて，計画的に取組を継続し，引き続き業務改善に努めるとともに，全職員で「働き方改革」に関する意識を高め，業務遂行にあたる。